

北游錄

明治三十三年七月

乾

特別
14
1919
52



ついで云々

○才二海國を市街の西に其城址をたす支吾を欄の
云及ひ川の南に之をくまの地をりを即ち山城ついで
ついで南に流しりありていへば公征韓の時を記
おもてるに陣のついでを記して後軍をこへ
以宗法に受けしを子仙を記ししを記して
たつたのさまで以宗の真の意を上使のついでを
行するあり下馬下乗せしめんありて子孫を記し
と云々

○宮殿を建てるに仙宮を後方養賢堂の跡を以て
賢堂を孔子を以てししを記ししを記ししを記ししを
りて其教育史を記ししを記ししを記ししを記ししを

と稱し元和七年以宗谷傳左門を名けて倉庫とす
一平内沼草あり十世齊言あり文化年名大槻
民治(号平内)を名けては子孫ありてありてありて
の興隆を以てし民治表の賢堂を記ししを記ししを
を教授する文政二も聖廟を設けしを記ししを記ししを
りて文化六年己巳是年九月邦家命大槻清直
講書台制八年辛未置田苗二十石十三も丙子
正月經始講書の年丁丑十二月講書成講書之制
方一百有五十一尺寸分爲二十五寸中央一尺寸爲
字之外盡而爲八區四正爲室、四隅爲雷、其室
爲校、而其設雷所以容乎也、其外爲十六寸
是爲序、序之外、分爲四、是爲序、序二十有五

室為云、以てけり祝儀とあると云ふ

○宮城野と櫛を以て事の渺く、今も宮野一面を云ひ
観海州志ありと

南目村有曠野謂之宮城野而古人所稱者是也
自木下鬱林以北至原市馭自山榴岡上以東至興
館村、平原渺々草野、草上錦萩、古今專其名
女郎花、秋葉、藤袴、刈萱、桔梗、及無
名野草無數、秋花以百數焉、又雲雀、鶯、殊
多、武果、武育大守之於羽獵也、欲獲之、多為故
平日禁雉、矢、帶、葦、者、不得、妄、射、英、鄉、人、呼、曰、治、巢
原云

まゆりのえとあると云ふし、而して今も中二の園の傍に

坊にさう化し、あると云ふ、萩も近々、今もこ萩也
しと云ふと一様もあると云ふ

観測志と名、相陸奥守為仲み、やまの萩不
り、この萩、さう、為、仲、佐、と、云、の、り、け、る、と、云、
城、の、の、萩、と、云、う、と、長、檣、十、二、合、の、入、を、お、こ、の、原、
り、け、ぬ、は、人、あ、り、け、る、と、云、う、と、ま、り、け、る、と、云、
二、條、大、路、を、と、云、う、の、う、と、人、ま、り、集、り、と、事、を、
と、も、あ、り、と、云、う、と、け、る、と、云、

○宮城のの、萩、を、う、と、み、え、る、は、萩、の、み、と、云、
安永寛政の、以、天、下、の、力、を、う、と、高、め、る、と、云、
松、尾、公

風櫃と四背のさり六尺寸を四十二貫目(之を減り)
室日村のききり

○楯ノ周を才三張圍兵言の例に依りて名のみ昔
しを齋館の木多く其を以て名を掲りて都々
茲招と云ふものさく出せしと云ふものさく一本
の齋館と云ふものさく後内の佛堂あると云ふ満月堂
然るにそのさく手入れしと云ふものさく不
審の思ふと云ふものさく但し此のさくは方角の
さくを多く掲げたるものさく何れも無掲を掲木
なる人多く得らるるものさくある様あると云ふ
油島に云ふものさくは小くも掲げたるものさくは
輻輳懸崖と云ふものと云ふ

○江ヶ峯の室ノ廟と云ふ所の西南に南九つ段子
あり程若程典を欲し納めしと云ふ所ありと云ふ
又て山井村松天を刺し城址のさくはと云ふ廟に
竟のさくは政宗以下二代の横をさくはと云ふ廟に
宇の精舎ありと云ふ也中祀聖の果と云ふ廟に
了る能くさくは政宗公の廟也と云ふ所ありと云ふ
山つらみり大なる事を潜りて石段數十段を登りて
所ありと云ふ瑞鳳殿三つありと云ふ所ありと云ふ
押さるる大なる所ありと云ふ所ありと云ふ所あり
く政宗廟拜殿從七間横三間廻廊重檜梁柱
雕刻羣飛鳳輪奐華院金碧照耀其後有
本殿乃政宗公墳也と云ふ所ありと云ふ所あり

廟に比ぶるは固く及ぶべくもあらず公の墳墓を圍ふ
て殉死者數すなり墳墓あり人をしとせらるお建の代
君臣の情愴目を述べてし遊苑とて又あの羽林義山
公の廟を感仙殿と云い後の羽林雄山公の廟を義忠
院と云ふ感咸と祀廟に比ぶるはありし遊苑とてあり
又三廟の外に仙台候奕世の墳墓あり皆天皇御宇に
祀廟を設けしが也伊達宗基存るを四柱と云
せし所のありし境あり一大お魂碑を建つ又柵方
山川の内より西討戦死ありす魂碑あり
○仙臺に於てありしを考へてしとせらる左に其の
かゝるものを考へし

林子平の墓 北八番所伊勢堂山下新宮院境内に

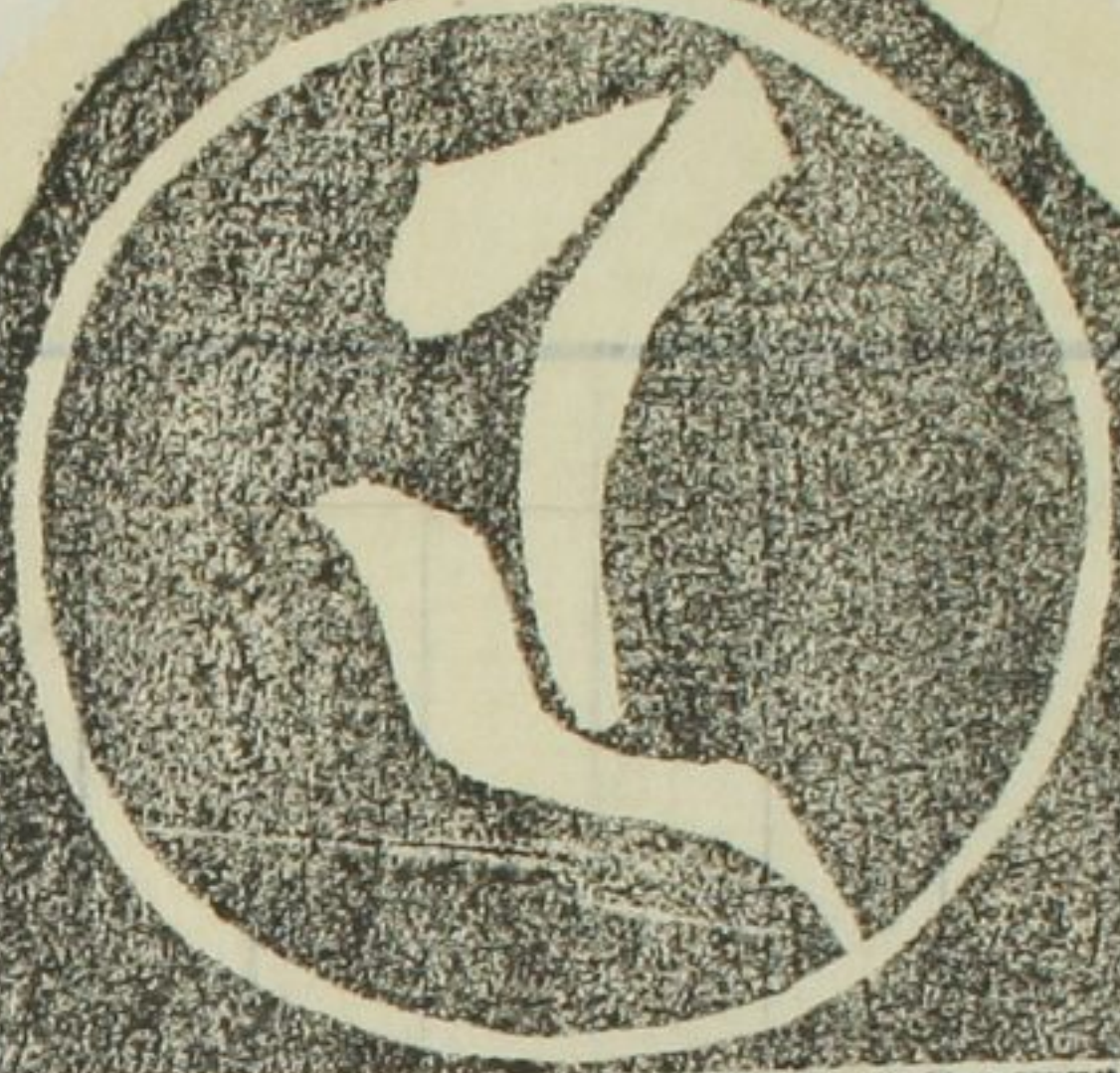
在り碑面より六長方直之墓と刻あり又聖公爲小
世の後一大紀念碑と云ふ
支倉吉右衛門の墓 も久しく湮滅して現存せりし
らぬに二十七年三月北山寺境内新井梅屋の墓
埋もれたるを考へししとて碑も五輪の如き
ありし「室風火水地」と刻しし文字の室風二字既
こゝに換し僅に「火水地」の三字と微に「〇〇〇〇
祿室門」の七字と見えしを考へし
新井梅屋の墓 新寺小路生因寺(今度寺と云ふ)
ありし「夜海」の標文并に梅屋と見えし
改周の墓 ハの家日蓮(宗孝)の寺境内に在り
碑面より「伊氏初子墓」と見えし

也新成心権少将左陸奥守伊達綱宗側室三子信
長世貞育三子中丙寅二月廿四日歿年四十八歳と刻
す俗衆これを以て亀千代の保母以て子の生とす
詰す所の引七切らるゝ伊達大系譜をあたへし
三子也初子と三は権佐治長のあつて後命神眼
院殿とすす乃ち綱村公(亀千代)の生母とて信
村公の側室とす

かた谷尾の墓 南飯沼町牛沼寺に在り
おのす尾の墓 志保町の菩提寺境内に在り
えん初代左尾の墓 志保町の菩提寺境内に在り
龍尾母道終の年七十七歳とす二十丁の正徳五年
二月十九日と刻す

○宝城縣の三碑 一も岩古の碑 二も多賀城碑
三も松島雄島の碑（此の碑）（このころ）

一 燕津並古碑 此碑を軍人七つ木の碑と
云ふ此古をさるゝりて也 碑を仙臺とすし東南
一里段榴とすのふもす可く出む玉田松田中
とさきん程は行くこと数町ありて岐路あり
こゝらと左折してあまの村とさき比の丘尾に在り
越えんは並津村に在り 政傍に觀音堂のあり
世古の碑あり高廿六尺幅三尺なりとす碑
面より五十一字あり刻す多くは古紙に或は書
をぬきたりとの或は梵字の坊のこゝのありと
説きたりとす



夫昌ノ直宜ハ亦耐

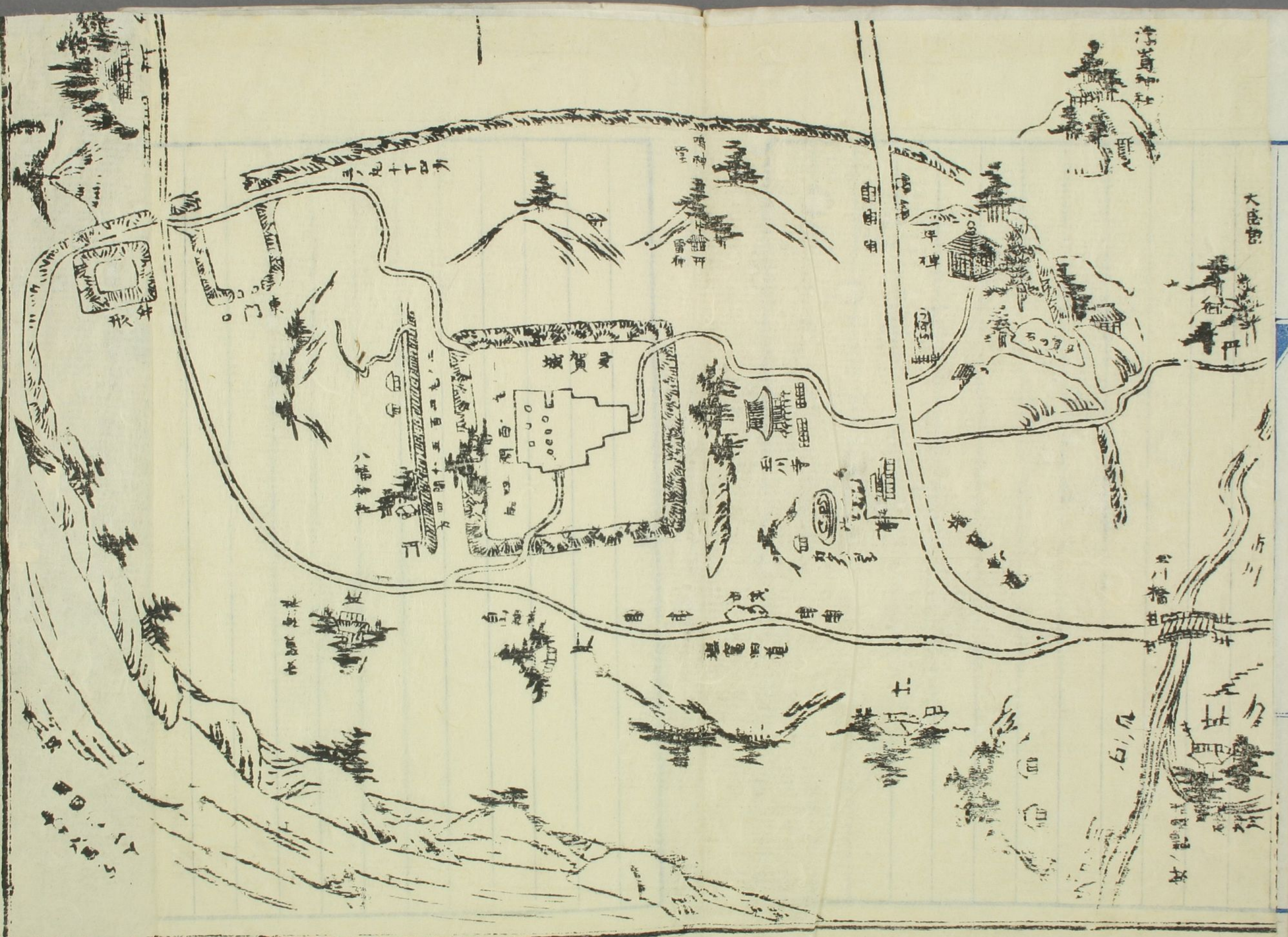
入豆益ヲ致ノ又

北州出砥平止竟

元嘉元年十後殞矣

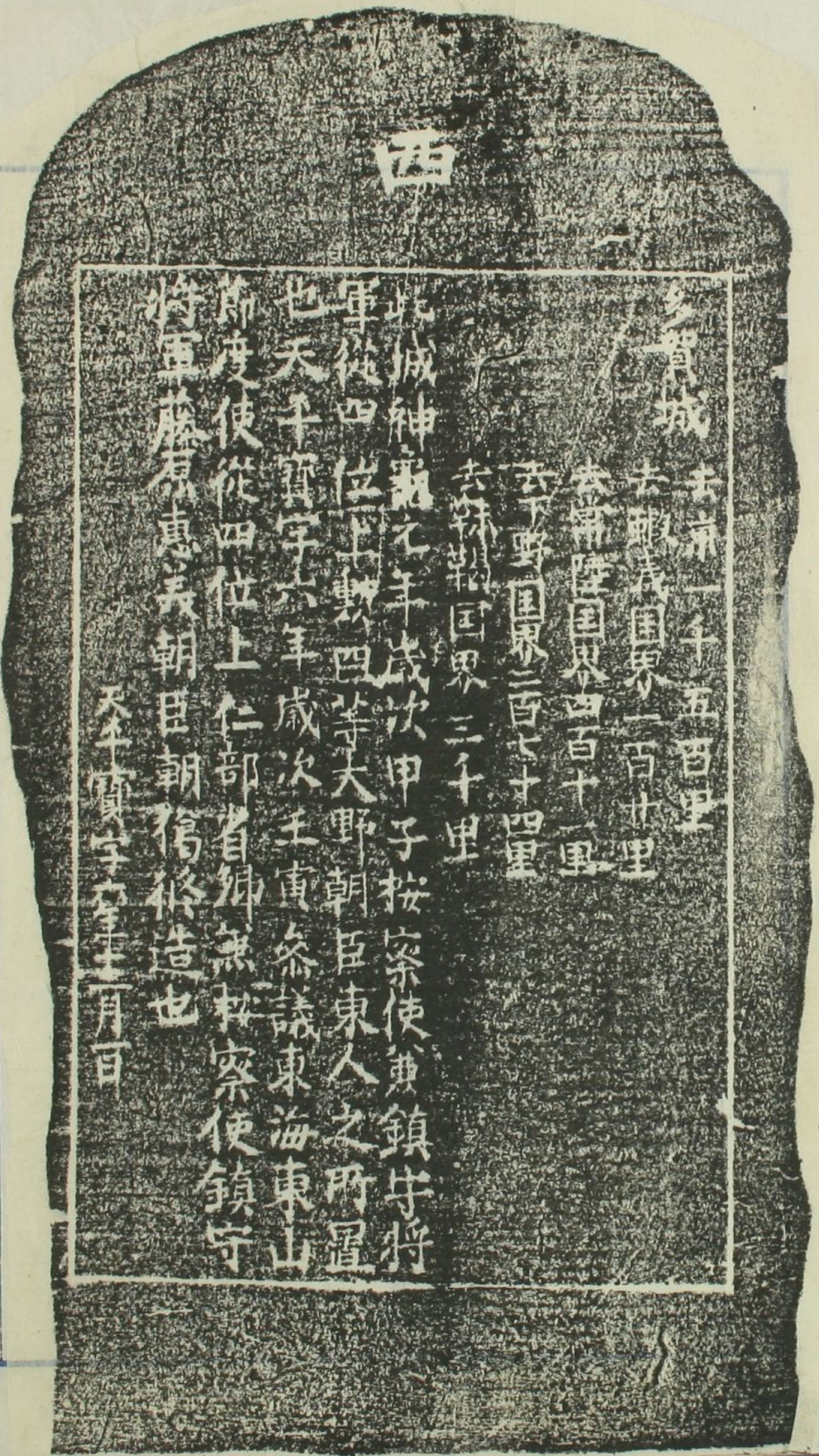
弘安元年九月廿五日果天

案... 桂林後録... 祖元和尚佛克禪師と
諡す... の... 文... 此...
生... 此... 志... 弘安... 元の世...
我朝を... 弘安... 元の世...
八角島の澳... 八月朔...
起... の... 十...
く... 弘安...
五... 弘安...
北條時宗の人... 弘安...
こ... 弘安...
和子一塔を... 弘安...
一... 弘安...



尺便三錢五厘

一多加賀城碑 附城址 多加賀城址を岩切停車場
 と銘ぶ東南二十五町古城跡多加賀城村字市川
 の南前掲取園を聖上北巡の御村人勲に奉り
 誠之子おきしと御坊より供せしものさうとそよ誤るま
 を保ちありと長しと地元の大畷ハ以て知るを得べし
 城址を方形の四方四角の河内中塩竈道とあり
 ハ近所川原の跡をさう碑をたつ所道の側と
 ありし碑ハ^{（附）}民家とくありし碑^{（附）}是完
 ともなるさ由の高より二層ありの社も立つてなる
 やの如き景あり
 相傳小多加賀城を即ち鎮守府とて聖武天
 皇神亀元年蝦夷の成とて鎮守方山軍



西

多加賀城 去京一千五百里
 去蝦夷国界一百廿里
 去常陸国界四百十一里
 去下野国界二百七十四里
 去林野国界三十里
 此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將
 軍從四位上數四等大野朝臣東人之所置
 也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山
 節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守
 將軍藤原惠美朝臣朝禰終造也
 天平寶字六年五月日

大野東人の如く之を土く而して古文は淳仁亭
の天平寶字六年鎮守方印印意美の朝臣
朝猶之を修造せしものと記さる

碑も字六尺五分厚九尺六寸八分石基九尺二寸
七分碑後三稜と為し碑面深二尺六寸四分より四寸
五分上も下も四尺五分あり

此碑四圍格子を削りて一枿のたゞ四角堂のゆゑ鄭正と
保たせんとすなりと云へり一は是は是なるも碑
面鏡の如く潤澤あり

碑の入り目石にす母をさつ不のいゝ如く
と刻したる標石あり元祿中なる事然るも之
んを以て並の碑と同祀すも其を考證せしむるに

未だ一言をすつ不のいゝ如くを流せむは北の
碑を以て同一物祀すもやあらず

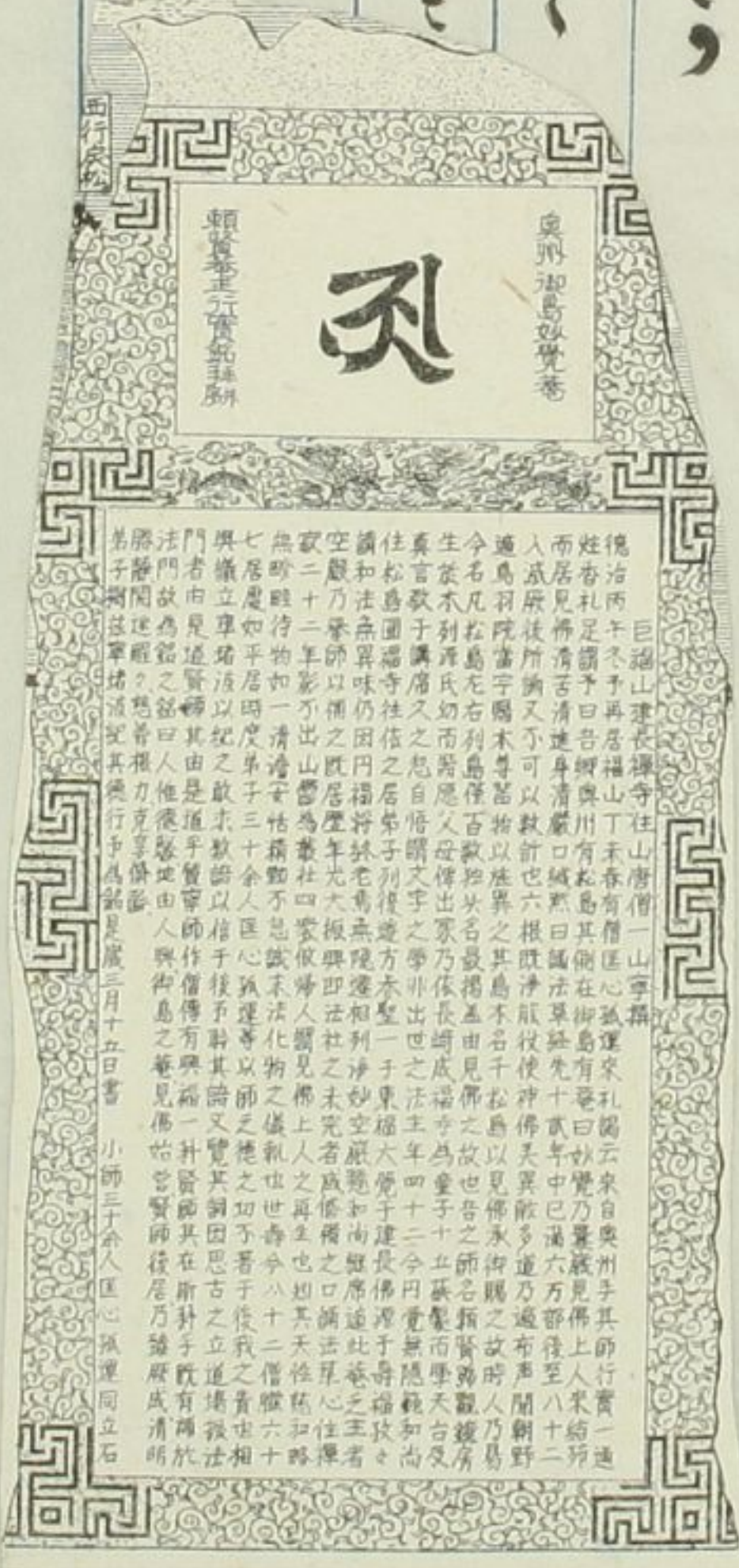
此の碑は何の爲りとせしめしむるに注説録に
本と云ひ若し其の概つとて四境の邊に
一なるものありと云ふ事並の碑を以て同一祀す

解して同く其の載りてしむる事並の碑と云ふ
事

此碑の文を撰み録するに同く此碑久しく榛莽かり
埋没し其の年人のあらずしむる事並の碑と云ふ
是四卿との文字も大守信村公方の傳りし事
び大守信臣依久百洞皇殿に命りし之を撰み
めたる子市川橋の橋材中りし此の石を云ふ事

或る事なきに多かる世のありて礎やのちのつばふ一
 にはあまの行てんう古きるゑ思ふのあさもつらうとよよ
 リニ丁はうもやとおもひのちと碑たこも上気はひの居ん
 そつらうの扱るをよとれを主と碑すうとこしんもま
 けり久しうもあらうの中ようのしんはとく千二年の
 くちん人しんもあらうしよもんまのつゆを信おふは
 れしめは信おふのあ人田をいせあもつらうつたせと送ら
 れたりと此碑のせと野んはしめさうとよねえ
 福十と斗と打そのしんもまの人のみさうやまうと文
 のすまはと節るをいさのゆきと物もをを皆めひた
 とあまのこはまらうしよもんまの碑一と碑もたまらうと
 又たはらうとつらうのあまのやまの碑たの人もあ

といは中まのやう
 うさあしめうとさ
 けりうあてさるん
 といは中まのやう

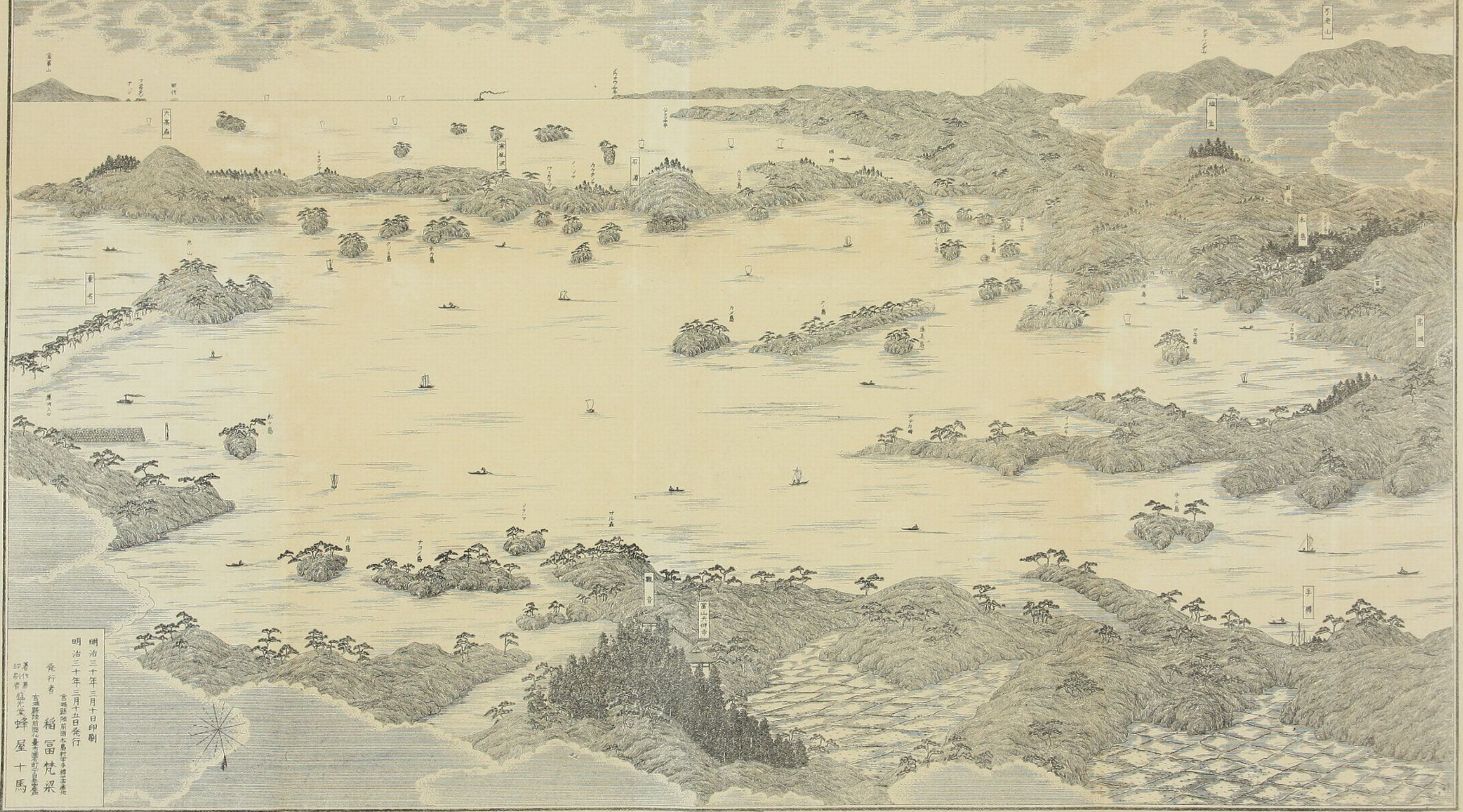


といは中まのやう

一 款安の碑 ともが洋島中の神あり
 古儀三碑のてな教ある高をうと
 筆もも筆法道美蓋し
 物もも筆法道美蓋し
 横た一山言のちくしく風



陸前富山大仰禪寺眺望之全圖



明治三十年三月十日印刷
 明治三十年三月十五日發行
 宮城縣陸前田舎村字佛王堂
 發行所 稻田梵梁
 吉澤野原町八番十番町三丁目
 印刷所 盛光堂 蜂屋十馬

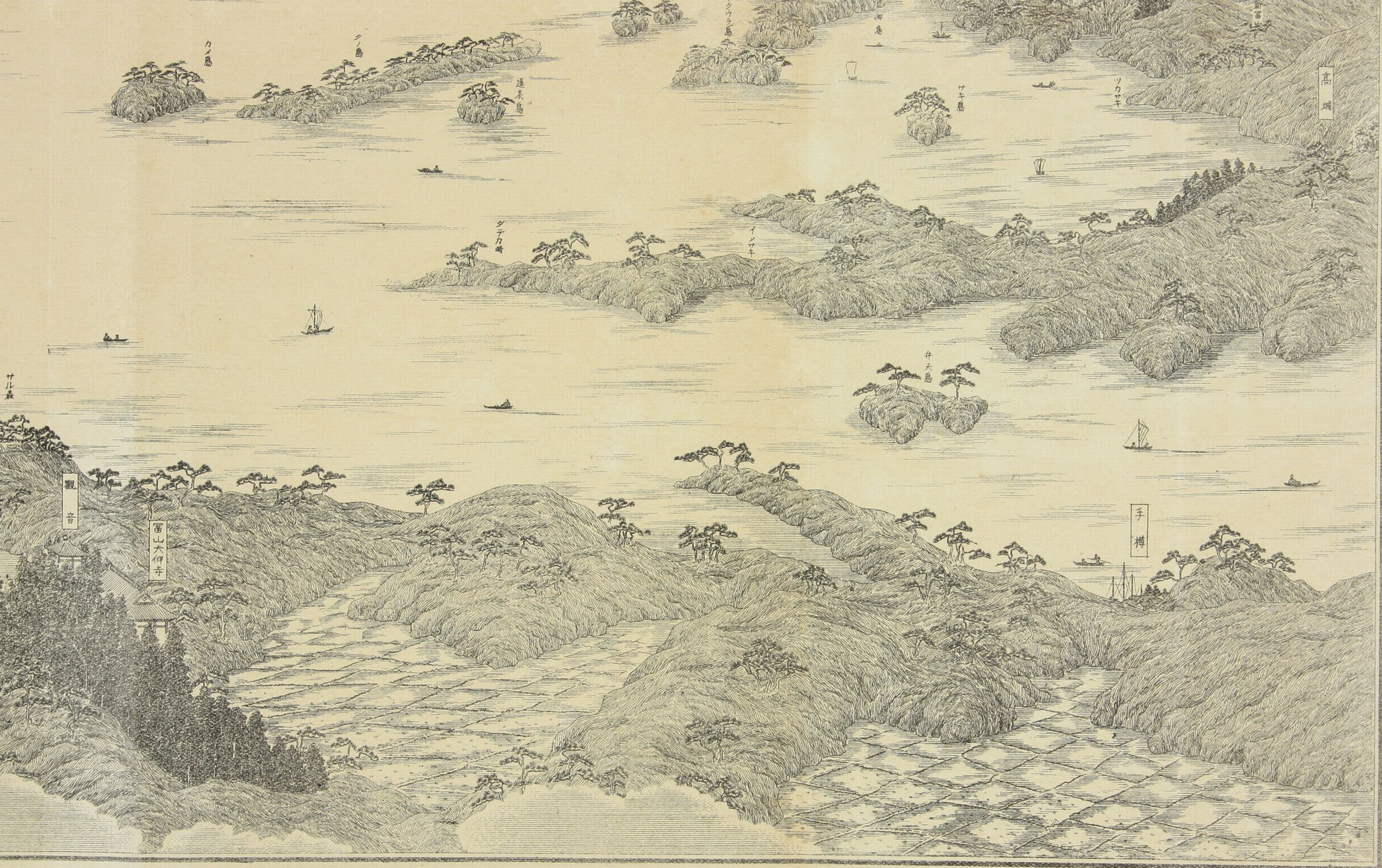
目録
 陸前富山大仰禪寺眺望之全圖
 一三三



9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2

陸前富山大仰禪寺眺





高城

ツカサキ

ササ島

クワ島

送未島

シノ島

カノ島

クワ島

イノ島

弁天島

手樽

富山大何寺

観音

サル森

東名



力ノ島

運河入口

松ヶ島

月島

ナクノ島

シラマ

ナル森

観音

富山大何寺

明治三十年三月十日印刷
 明治三十年三月十五日発行

宮城縣陸前國松島村宇手樽五番地
 稲富梵梁

著作兼
 印刷者 盛光堂 蜂屋十馬

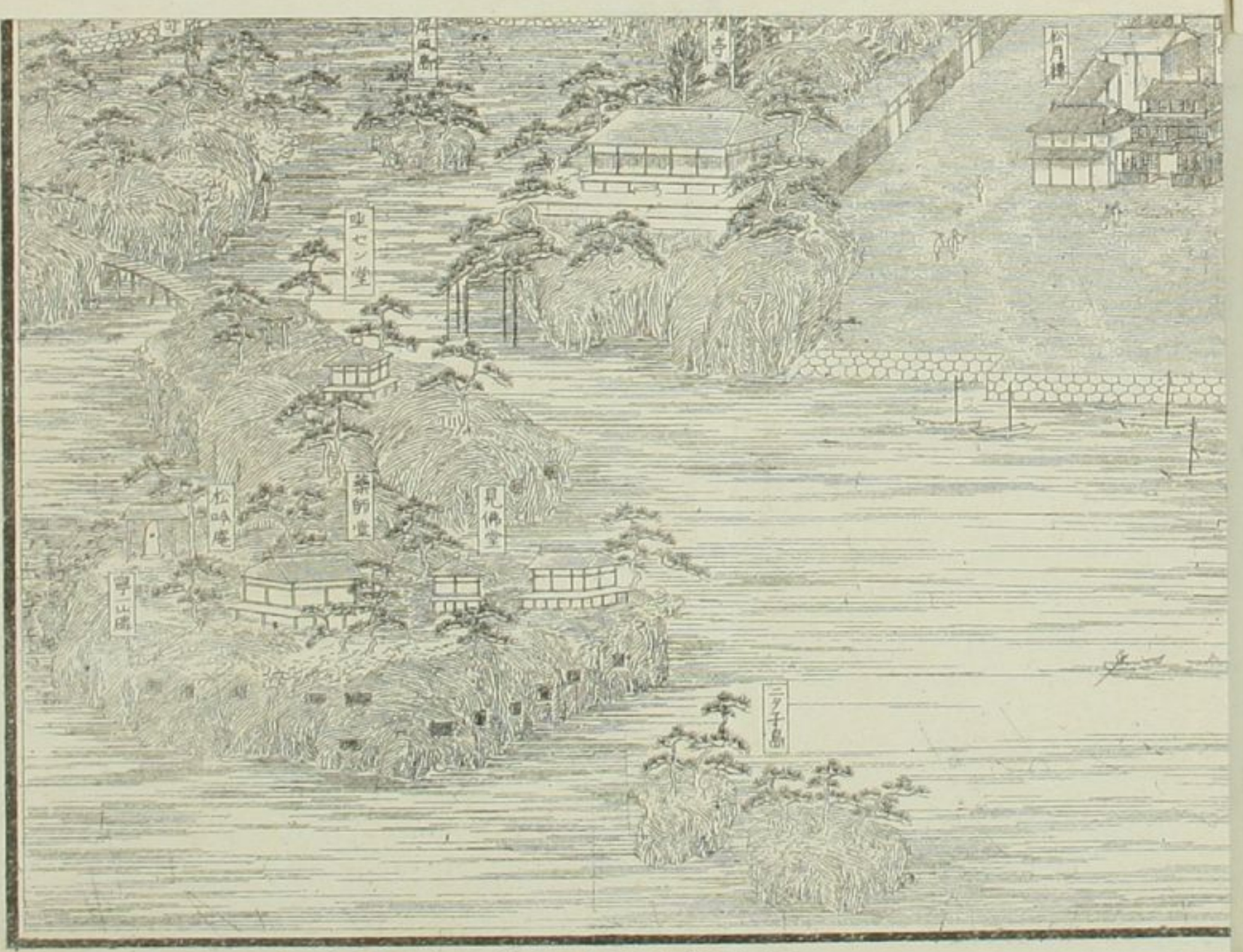
新編海防要略巻之四

松島群島百を以て島の而て海面より一
一島を一島を添へ一島を一島を隔つこゝを
地を以て別處を以てし得のこゝを以て
地を以て下敷するも松島初めを以てし得
松島を以ておのの動しては地國の境を以
こゝを以て下敷するも松島初めを以てし得
松島を以ておのの動しては地國の境を以
こゝを以て下敷するも松島初めを以てし得
松島を以ておのの動しては地國の境を以

山を以て以て氣を以て流汗を以て
艱を以て以て以て大仰を以て以て
山を以て以て以て山を以て以て
の上を以て以て海を以て以て

暇傳ふにやるるを左の如し

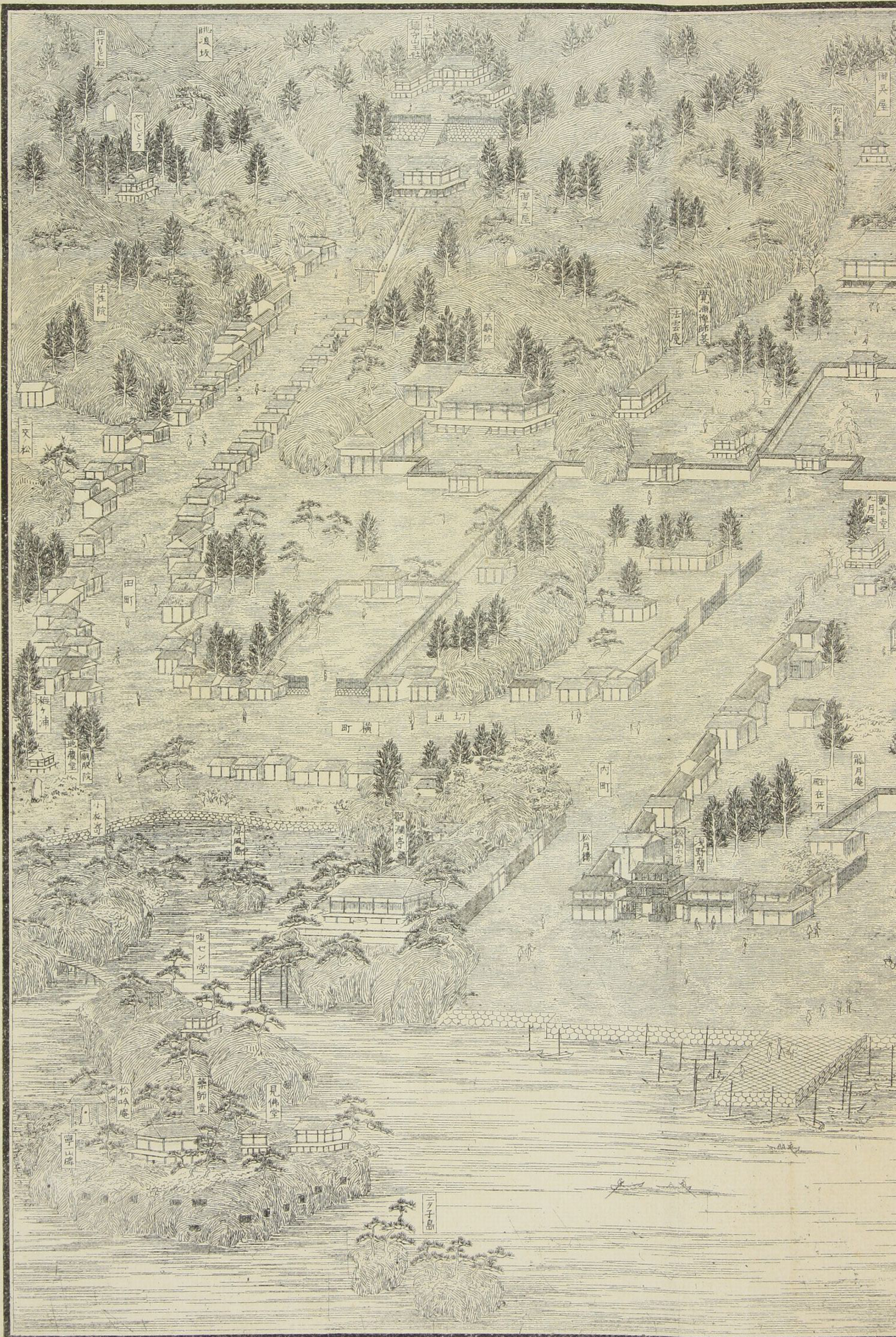
瑞山殿寺を住持する松島寺にあり仁明帝の御
和号を慈覺大師の御号あり元其のまゝありし
後心條時款之を修造して法外禪師を二五裡と
する松島田福寺と號せし法外を其聖号
其名を三十四なりと云ふ深く法外を仁下ま
入る河を河山のを準するよりよりゆかりあり
と云ふにやる(以上名無あり)後大覺覺聖
覺、覺佛、明極を云ふる唐傳ありし位觀
九十一世義山和尙よりして鐘有く連書寺流と
次世宗中和尙の代より心寺流の属あり(望海
左文由湯ありあり)後陽成天皇其未九年八月伊



島村字松島百三番地瑞山殿寺内寄留
石 人 兼 釋 薩 水

地番七十四日丁二町分國市台仙郵治為辺渡者刷印

山全圖



宮城縣宮城郡松島村字松島百三番地瑞巖寺内寄留
 著者兼
 敬行人
 釋 薩 水

地番七十四目了二町分國市台仙郎治為迎渡者刷印

晩修の記する宗左の事

遠政宗臣中村宗老其子余りして高山の政造を
監護せしむ是より松尾紀州熊野山より本村を
元より良之を構ふるありの徳に百三十余八中村
日向老次と云ふ者を擢んで都料正三とて創
り置し一と其の年十四年三月を以て上棟式と
爲り瑞雲殿の御寺と改唱し創めて伊達家
累代の甘露授けしとあり、並て大仰創立の年あ
りて其の一千〇六十三歳法身禪師再興と云ふ三
十二歳(略志)

佛殿と堅二十一間横十二間正面と天竺と云
法華を尊ぶ正観音を安置しと本尊と云ふ像より政
宗似甲冑の像を安置せし又殉死者の位牌

を列す傍り傍りと裾の短而變りまきの大きき織
月形(長サ丸ニ尺ニ寸)の前立物を戴きし子
軍配の飾を推し床へ踏ししりまき衣をせし
り

寺由本堂より化々堂の裝飾彫刻襖のハ眼目を寫
らざるきまのあしき

一本堂 縦十四間横二十一間四尺、総檜石の彫
刻も大なる懸、彫りも甚多き寺、牡丹の目、
柳の風、風、花の飾の多、牡丹の花、花、
花、花、花、花、花、花、花、花、花、花、花、花、
の作もまじり何れも甚多きとあり

一墨信の間 襖の傍りまき山拾ひ猪頭

席をまき信公墨筆に狩野は法眼三本同法眼
信公のの念書あり

一白菊の間 襖の傍りまき狩野は法眼三本
の草

一松梅の間の間 襖の傍りまき狩野は法眼三本
の草

一唐の間 襖の傍りまき法眼三本の草

一和室の間 襖を法眼三本の草

一文王の間 襖の傍りまき周の文王と狩の草

一上りあの間 車箱つ段まきまきの六子作
の二つ大和千手をまきまきまきまきまきまき

下殿と階ははらへるを身一と云ふし

一五大堂 此堂を親中志の作と云ふ也

甲 此松島村の車は馬子斗あすかす鳥と云

鳥よふ五大堂より大同年中上田村麻呂車征の日記

地まよふと多つ元の像をあましほる道元大師五

大のまの像をみよる所より五大堂と云ふ也云ふ也

り以て名を給左のつおに余しと堂宇を修めし

中しめ以てけを親を新なるす云云云云此の云ひ

陽を云ふ云々云々

有二短橋兩岸敷似其横梁一断一續此其

河橋下水深千尺臨者眩目度者傷神人或

比之銷魂橋岩畔多長松蓋往昔有藤其蔓

而花叶橋上敷云

紅古藤其蔓云々橋上は橋のう紫を垂んたる

云々云々美観云々しと云ふる也云々

かみりけをわさるもやうもあめ

と云ふ事いかる松島の事

の松島 余の世長しと云ふ事の云々云々

室の院の海より小島のいなる此松島の風をさる

又云々云々も松島備の事也云々云々

次海は流る汽車の中云々云々海の静を云々

しと云ふ事云々松島の事云々云々

と云ふ松島の事云々云々云々

有年山月、未照、中、年、金、色、也

一、官、物、是、平、景、子、孫、孫、二、四、六、馬、權、上、四、六、孫、
元、名、利、事、風、占、以、九、十、年、

吾人、と、ま、た、と、進、み、し、先、を、と、て、之、を、進、み、し、
河、上、同、家、を、流、り、し、三、衛、の、中、金、色、の、中、
き、う、み、の、此、を、流、り、し、上、四、の、戦、を、と、り、け、し、立、の、華、を、
抱、め、之、を、流、り、し、七、佛、の、中、を、流、り、し、深、義、を、流、り、し、
之、逃、れ、し、一、名、を、流、り、し、地、と、し、し、又、佛、の、中、を、流、り、し、不、
承、年、の、終、り、を、流、り、し、其、中、流、り、し、之、を、流、り、し、三、衛、の、中、
半、を、流、り、し、之、を、流、り、し、之、を、流、り、し、之、を、流、り、し、
大、名、を、流、り、し、之、を、流、り、し、之、を、流、り、し、
〇金色也

少志志、四、梅、金色、堂、め、土、人、所、謂

光堂者、是、也、在、經、卷、東、南、柱、各、四、股、花、界、大、日、十、二、
軀、彫、螺、鈿、細、文、堂、内、畫、金、色、中、構、三、壇、各、上、置、佛、像、
壇、下、皆、三、代、之、屍、也、大、壇、乃、座、基、衛、右、座、秀、衡、前、
壇、清、衡、也、後、水、尾、亭、寬、亦、中、芬、門、時、修、補、之、次、令、
人、跪、而、巨、檢、焉、清、衡、棺、長、六、尺、曠、二、尺、裏、之、以、白、綾、
漆、其、上、納、椎、釵、一、口、并、鎮、守、府、印、印、面、上、其、基、衡、裏、
之、以、白、絹、朱、其、上、藏、白、衣、表、錦、袍、秀、衡、亦、同、之、藏、
和、泉、三、郎、忠、衡、函、首、高、二、尺、方、一、尺、五、寸、黑、漆、壇、
上、佛、像、中、之、者、彌、陀、是、乃、定、朝、所、心、觀、音、勢、至、相、
並、于、其、前、多、門、持、回、而、三、六、地、為、後、擁、共、雲、其、文、所、
造、也、云、

金、色、也、正、應、元、年、鐘、食、心、印、惟、康、夜、王、北、堂、之、中

關山 中尊寺 全圖



京東北町六分

4
3
2
1
40
9
8
7
6
5
4
3
2
30
9
8
7
6
5
4
3
2
20
9
8
7
6
5
4
3
2
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

二〇

堂は四十餘宇増坊三々餘宇を有するの寺其の規模の大
以て知らる

○經書 此寺に在る書とせば遺存するもの一三三の
位と云ふも其書も亦るに天仁元年藤原信衡の遣はし
着りたる二層の書と云ふ一三三の建武の祝聖と上層に佛
七しといふ所の殘りたる修徳を施ししもの一層の
書と云ふなりとある也

經書堂在るを西北構八架三三三代所寄附一切に
三部細紙金泥銀泥法衡細紙金泥基衡宋
本黃紙素衡寄附也堂中所寄佛像多文珠圓
其又作最精妙千手觀音二十八部衆因作其妙
弘通真東鑑千手本像二十八部衆各鍍金銀

是也

經書佛像一〇尊一尊をともも皆其佛世のそのまゝに
祝聖を念みはたきともふべし

○弁天堂 經書の中は弁天堂あり中より觀
るにそのは最勝王經細字の寶塔曼荼羅十幅
といふ

中尊寺に屬するに觀るにその丸を如此

○毛藏寺 寺のあり多く中尊寺を以ていふも
細寺と稱ししと存せり隨つて人〇多くいふと
兼も存るに其規模中尊寺と伯仲あり少しく
は縁起と状況を記せる可なり

寺泉ありといふ毛藏寺を千手堂の飯坪の西南に

高より即寺境の総元として園隆寺を嘉祥寺
此寺の附屬あり仁明天皇の御宇嘉祥三年乙酉
師の子基より大師濟良の御宇奥子巡歴一
神錫と此地を爲め伽藍を造り給あり嘉祥寺と
寺號と白鹿の山路を踏く者守くの我より云
小生及是を好み好く好く好く好く好く好く好く
長治中あるは清衡再興するを天宮更なる園隆
寺の宮よりあり清衡よりあり蓋社堂坊舎を造り
堂塔四十餘を造り給あり月令よりあり泰衡
没るに嘉祥よりあり子應親を保持する嘉祥二年
十月丙嘉祥よりあり及は清衡を修め給あり鐘樓被修

文殊持門寺圓祿の興る羅の如くも歴朝殊崇
の勅給不たるを以て高公家をもも細寺におも
く施元龜天正よりあり六變よりあり親自在王
南大門を如の社堂坊舎殿宇よりあり橋を造り
よりあり寺の又興を造るを修め給あり路を
よりあり或を修めを修め給あり現存の社を二
十寺位金十八坊ニ修め給あり

も細寺親授の社堂坊舎殿宇よりあり橋を造り
よりあり寺の又興を造るを修め給あり路を
よりあり或を修めを修め給あり現存の社を二
十寺位金十八坊ニ修め給あり

東鑑曰園隆寺安丈六葉師及十三社白雲

所造塾玉以上腫三年而成基衡施其方以黃色
百兩鷲羽百尾徑七間水豹皮六十餘枚安達絹
千匹希埤細布二千端信夫毛地摺千端而贈之
雲其其餘產山生海物竭奇悉怪焉別言生
美絹三般雲其又曰嘉貶之厚俱足可貴也特
美絹甚愛之其基衡重之高三般時其精妙之言
盈乎浴中後達天聽鳥羽三其甚惜其出基衡
患之閉戶斷漿水已七日以禱之且歎之九條
白殿達福上少有助許而遂其基衡素願
孫系之衡之家年之暇々佛衣々々々々々々々々
〜〜之衡の歴史と揚げん
ま〜〜藤系傳衡傳法衡傳源義家攻法

系家衡武衡于出羽滅之欽何洋加賀等六郡
之地为陸奥押領使國人称曰御籠自江刺郡
豊田移岩井郡平名而卒子基衡为陸奥出
羽押領使奕世其疆吏民奔附勢是四衛子
秀衡基家之二年任鎮守府以有法新朝起義
子氏請授陸奥守子泰衡为陸奥押領使立
及出羽文次五年新朝甚共討之泰衡自敗
道過平名不能入放火燒城樓櫓屋于一の灰
燼

于其城址 二衡之據るを以て其城址のそとをいし 城址

○衣川 惣井塔のりふ流る而して衣女言被
の道と則ち川南惣井のりふ流る此のりふ唐平の
頼義義家阿部貞任を尊しとまゝ貞任地のりふ按りて
功徳をいふ

○衣川 衣女前項と曰く頼義貞任のりふ
大塔のりふ地を親少志といふ高被一町録山下有小
園路是古園門之址也東史曰此地昔時西界白河其
東限外渡行程十餘里於其中間三度つ名曰衣女又
平泉志に曰く中寺の西界に陰塔といふ古来因寺
の山を衣女山と号し寺塔建立の時の中寺の園路を
衣女といふ人信連の道といふとて傳へて今もその西北
より方々に園神社あり此をいふとて論う一は衣女の

園と柵門番を畫けり但し役人の名を圖とくるところ地方
の古傳に説く事ありといふもいふもいふも用ひて元後せざる
といふ事ある古の二園ありといふ

○衣川被 衣女被も衣女志に曰く衣女
被在平泉村東阿信頼の所築曰之衣河被
文流中民部少輔基成塔此被義我任自殺于
茲世科言被是也上有義我任古墳一町有一極
相今猶存焉是乃信連のりふ也信有子其り衣女
天和中 我前右守信村右建祠也祭義我任
魂又平泉志に曰く衣女被と云ふ事あり
衣女のりふ里俗之を衣女被とも云ふ中寺のりふ
事ありといふ所記を信の東鑑事加出被の條

角所を隔つる銀の南へとをるとえ院址の平如き
信長御子居安の名ありし地也西三所南北三所許の平
地うへと今田圃と云う所也其地ありしを道と夾めりて
銀を有る朝長は清衛正衛兼衛三代之を銀子
一と兼衛の子泰衛も其地之のうへを有るありしと
ありとを重光院のいふ並へ宿館と稱へりて同院の
平の一帯と稱へ伽羅木と云うる兼衛寺を有る泰衛
之の地をそととす此宿館を即ちそのの館とすて
其館を準し伽羅木と云ふ柳御不も未包ねん
流を平泉館と云ふとす一銀社の地也田圃も
漢人亦稀疎としてそを花の地と云ふ昔は
其の地を池とすの量火隠りの火鬼火をえりてた

秋と雪業の風を河原の清音山石の
明月照り淋しく冬と雪なほうへを雪の雪守の
乱雑いと其く秋の昔もさうう眼あふ深い懐古
の情を念ふと云ふ

○柳御不 平泉の地をいふ地也其の地をいふ
め清衛生衛のそをいふとて其の名をいふは後人
前民部の地有る其成(に頼る也)之をその源義経
も又都を有る兼衛の許にありしにやめ之をその
一とす其館をいふ館の地ありしと云ふとす
銀を義経のありしとす此館をいふ刻しと云ふ
一と云ふ也

○金太郎山 平泉の地をいふ地也其の地をいふ

○平舟の世をこす餘りな海より山又平に敷布す
す所のものもそをなやもたざるも命をさすなり
何れかの世のなまきりやまんと古のまなまの
を解すもよゆきなりを文獻に依りて徴する
石丸を以て揚ぐるなりぬし熟くまよふ山河の形勢
をまよふ子而産の産のえりあり又北平の接し
て舟楫の便あり而産の産のえりあり城書に
一交通の便を言ふる要事なりとて一陸奥の
てを以てし陸奥に於ては三衛の三脚地とす
なりとてし陸奥に於ては三衛の三脚地とす

百今こころもまはれぬとて代より一國をみよ
をまよふも維新の命を盤城とて代の五國に共

陸奥の地をこす餘りな海より山又平に敷布す
す所のものもそをなやもたざるも命をさすなり
何れか
を解すもよゆきなりを文獻に依りて徴する
石丸を以て揚ぐるなりぬし熟くまよふ山河の形勢
をまよふ子而産の産のえりあり又北平の接し
て舟楫の便あり而産の産のえりあり城書に
一交通の便を言ふる要事なりとて一陸奥の
てを以てし陸奥に於ては三衛の三脚地とす
なりとてし陸奥に於ては三衛の三脚地とす

一々之をが土人の物産を分けば要するは其の大地
とて上方の助の博とらまひて其の國を白雲を
用つてし板をさす北上の及りる之船橋あるに
四時其の由にて推して現在をたぬ人の子はあ
とて市の中なる井原をさす仙臺の熱田と同
又海をくもあす

○岩手山 其のこゝに記載漏れを治すといふ
岩手山一丸山麓敷山の一也こゝには依る南部富士
と名する山一とまるといふは形状なるた有なる漫
おも由にありて海の大なり

盛岡市の北の里と名する山脚を流る西山田原
松尾の四ヶ村を跨る海面を扱くを六ヶ人る人

一々休火山の属する盛岡を北山と名する
夕歌流橋の西を金と名する川の源なる
間をさす行くこと四百廿と名する流は打言板
遠する即ち岩手山の草葎麻子と名する岩手山神社の
建拜所社務所あり柳澤を二日駒山と名する
は馬と名するとも同なる山駒はは流る嶮峻嶮
は脚を流るると名する流る馬と名する
山頂を二日廿之を十人より一人目毎に花標
と名する目標と名する中流の嶮一き
は流る嶮を山麓なるあまなるを山麓を
北流を流るると名する嶮を流るを
は流る嶮を流るると名する嶮を流るを

よをいふ

二藩の間にありて行程十里を要する中、その長、漢以て
ありと云ふべし、而してその状、流を在、松島の文を給
て、立ちて、形、定、するを、いふべし

○津軽を、意、に、極、ま、津、列、も、心、存、の、天、皇、二、重、月、
越、回、寺、河、信、臣、伐、し、之、を、降、し、津、軽、郡、を、之、の、之、を、松、岡、
と、隸、し、轉、し、と、出、羽、岡、と、隸、す、と、あり、而、して、古、本、林、と、
津、軽、弟、一、の、良、港、と、して、今、も、と、ち、本、林、の、極、を、也、
ふ、ん、ろ、の、輪、輕、く、河、は、松、岡、の、道、と、向、い、つ、
あり

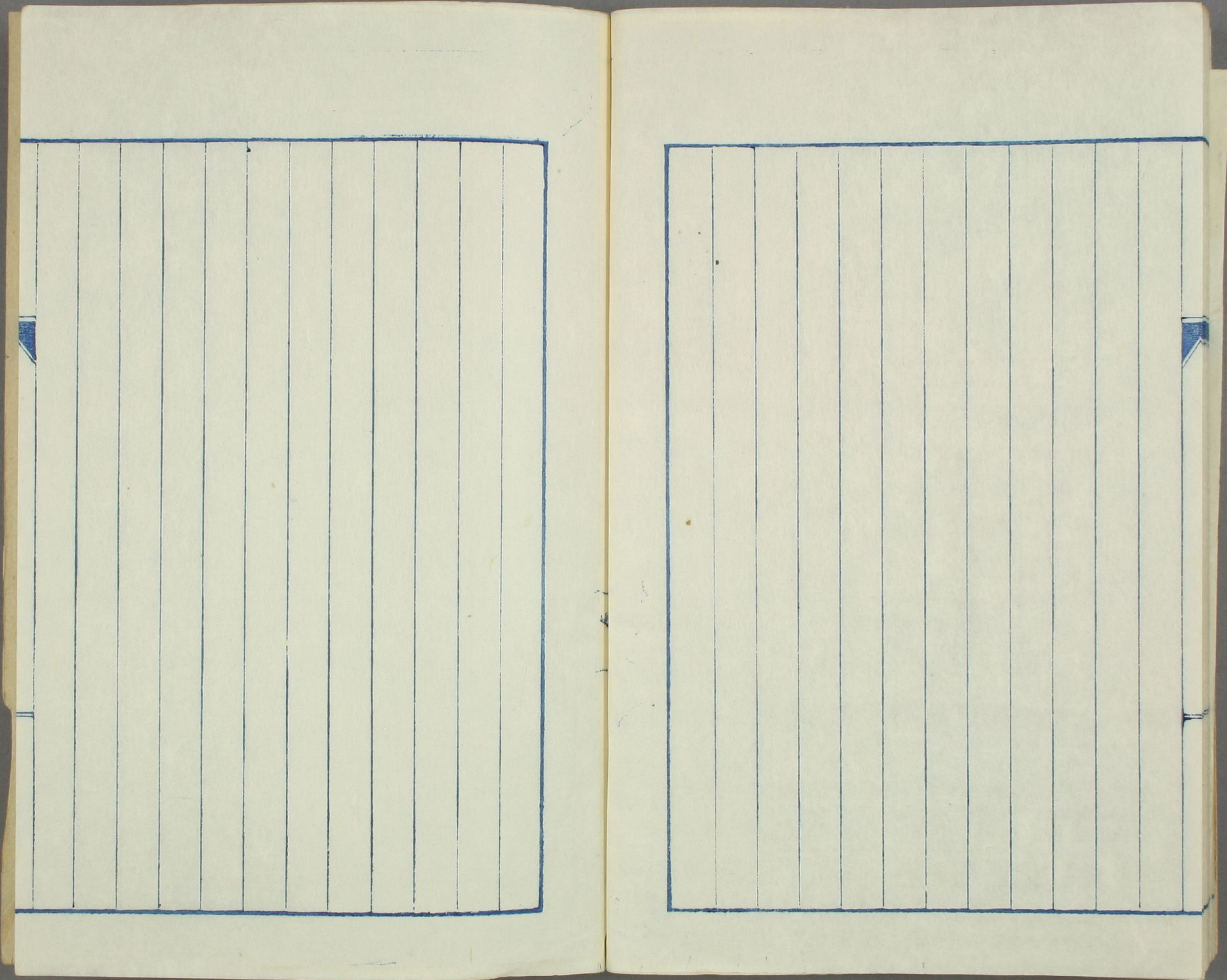
車、ハ、風、体、の、回、く、津、軽、が、津、輕、飲、を、四、方、僅、三、百、程、
而、して、流、の、極、を、極、め、て、居、る、と、東南、に、接、し、而、して、作、

氏、に、接、り、曲、折、延、轉、八、九、十、里、と、い、ふ、北、松、前、と、い、ふ、
こと、僅、三、里、邦、内、に、于、て、湯、美、田、良、村、あり、且、津、輕、其、
盛、る、を、松、前、海、邊、と、い、ふ、實、船、港、に、滿、つ、ぬ、と、松、島、
多、し、米、穀、等、鏡、以、貨、を、集、り、之、を、み、め、た、い、な、
ぶ、め、り、而、して、古、風、狡、猾、奥、羽、の、風、を、い、つ、と、津、
輕、が、強、く、な、り、と、い、ふ、

車、馬、路、地、の、日、津、輕、中、の、地、記、の、う、を、土、人、が、い、ま、き、
し、と、い、ふ、ち、く、く、く、く、と、い、ふ、し、と、い、ふ、し、丸、海、邊、を、め、く、
る、ち、く、ハ、九、十、里、と、い、ふ、も、及、ぶ、も、い、な、く、大、の、地、と、い、
手、廣、中、に、一、郡、と、い、ふ、土、人、の、言、ふ、所、を、五、十、万、石、の、
島、と、い、ふ、と、山、多、し、千、石、と、い、ふ、と、五、十、万、石、
の、地、と、い、ふ、と、五、十、七、八、万、石、と、い、ふ、と、有、り、と、い、ふ、

今より大抵をたゞしむるに要す堅固なる方なり
陸州府使と云はぬの申す所は人夫の口を三ヶ所の要
にまゝを方せしむる難きなり地をうねりしむる大
き部の地をうねりしむるに共をせしむる他なること
あしき事なりよあのみよて 餘の地かちしは
是をうねりしむる

補遺



以下全て
白紙

明治三十三年
七月

春城學人